



令和7年度全国学力・学習状況調査の結果概要

～千歳市立小中学校における調査結果～

千歳市教育委員会

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果概要

1. 調査の概要

(1) 調査の目的

- 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- 以上のような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査対象

国・公・私立学校の小学校第6学年、中学校第3学年 原則として全児童生徒

(3) 調査内容

- 教科に関する調査〔国語、算数・数学、理科〕

中学校理科は、文部科学省 CBT システム (MEXCBT) によるオンライン方式で実施

出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。

- ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等
 - ② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等
- 調査問題では、①と②を一体的に問うこととする。

- 質問調査（オンライン方式）

- ① 児童生徒に対する調査（学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査）
- ② 学校に対する調査（指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する調査）

(4) 調査実施日

令和7年4月17日(木)

※中学校理科の実施日 令和7年4月14日(月)～17日(木)のうち1日

(5) 本市における調査実施学校数及び児童生徒数

小学校 17校 795名 中学校 8校 742名 ※北進小中学校を除く市内小中学校

*学校質問調査の結果について

質問調査では、調査項目が変更となる場合も多いことから、次の4観点に沿って質問項目を抽出し、千歳市の状況を把握することにした。

- ① 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言の取組状況や課題を把握する。
- ② 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」の効果や改善に向けた課題を把握する。
- ③ 千歳市教育委員会が重要課題として位置付けている「小中連携・一貫教育」の取組の状況や取組の充実に向けた課題を把握する。
- ④ 児童生徒と学校の意識の違いを把握する。

2 教科に関する調査結果

(北海道教育員会の分類方法による9段階)

相当高い	… 7ポイント以上	ほぼ同様(下位)	… -1ポイント以下-3ポイント未満
高い	… 5ポイント以上7ポイント未満	やや低い	… -3ポイント以下-5ポイント未満
やや高い	… 3ポイント以上5ポイント未満	低い	… -5ポイント以下-7ポイント未満
ほぼ同様(上位)	… 1ポイント以上3ポイント未満	相当低い	… -7ポイント以下
同様	… ±1ポイント		

調査に準じ、問題を学習指導要領の内容(または領域)、評価の観点、問題形式と分類し、区分別に集計している。各教科の領域は、学習指導要領の内容(または領域)内の区分とし、新たな領域は過去の同系統のデータを参考にすることとした。なお、従前と同じ名称の場合は過去のデータを関連づけて比較・検討しているが、領域間で移行した学習内容もあり、領域名が同じであっても同一の内容ではないことを付け加えておく。

(1) 小学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立小学校 全国：国内の全公立小学校

小学校教科全体		国語	算数	理科
平均正答数	千歳市	9.1問/14問	8.6問/16問	9.6問/17問
	全道	9.2問/14問	8.8問/16問	9.6問/17問
	全国	9.4問/14問	9.3問/16問	9.7問/17問
平均正答率	千歳市	65%(64.8%)	54%(53.8%)	56%(56.3%)
	全道	65%(65.4%)	55%(55.2%)	56%(56.3%)
	全国	66.8%	58.0%	57.1%
全道との比較		同様	ほぼ同様(下位)	同様
全国との比較		ほぼ同様(下位)	やや低い	同様

国語については、全国を2.0ポイント下回り、全国と比較して前回の「同様」から「ほぼ同様(下位)」の段階となった。算数については、全国を4.2ポイント下回り、全国と比較して前回の「ほぼ同様(下位)」から「やや低い」の段階となった。理科については、全国を0.8ポイント下回り、全国と比較して前回の「ほぼ同様(下位)」から「同様」の段階となった。

(2) 中学校教科全体 ()は、国から提供されたデータをもとに道教委、千歳市が独自に算出した小数値
 全道：道内の全公立中学校 全国：国内の全公立中学校

中学校教科全体		国語	数学	理科
平均正答数	千歳市	7.2問/14問	6.2問/15問	2.8問/6問
	全道	7.6問/14問	7.0問/15問	3.0問/6問
	全国	7.6問/14問	7.2問/15問	2.9問/6問
平均正答率 IRTスコア(理科)	千歳市	51%(51.2%)	41%(41.2%)	487
	全道	54%(54.0%)	47%(46.7%)	505
	全国	54.3%	48.3%	503
全道との比較		ほぼ同様(下位)	低い	-18
全国との比較		やや低い	相当低い	-16

国語については、全国を3.1ポイント下回り、全国と比較し前同様の「やや低い」の段階となった。数学については、全国を7.1ポイント下回り、全国と比較し「ほぼ同様(下位)」から「相当低い」の段階となった。IRTスコアで示されている理科については、全国を下回った。

「中学校理科」について

今回調査から、従来のPBT(Paper-based Testing: 冊子を用いた筆記方式の調査)からCBT(Computer-based Testing: コンピュータ使用型調査)に変更され、IRT(Item Response Theory: 項目反応理論)を活用した問題となっている。IRTは、児童生徒の正答・誤答が、問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論で、国際的な学力調査(PISA、TIMSSなど)や英語資格・検定試験(TOEIC・TOEFLなど)で採用されている。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし(尺度)で比較できるため、学力の経年変化を各教育委員会・学校でも把握できるメリットがある。

問題構成は、生徒1人あたり、公開問題10問と非公開問題16問の計26問が出題されている。公開問題には全日程に共通する問題と実施日別の問題があり、非公開問題は幅広い内容・難易度等から出題され、生徒ごとに異なる問題を解いている。

結果については、従来のようなすべての問題の正答数・正答率ではなく、IRTに基づいて算出されたスコア(IRTスコア)ベースで公表されている。IRTスコアは、各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すもので、分布については、IRTスコアを1~5の5段階に区切ったIRTバンド(3を基準のバンドとし、5が最も高いバンドとなる)が示された。IRTスコア・IRTバンドは、難易度の高い問題に正答していると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出される。

IRTバンドをIRTスコアに換算すると、およそ以下のような対応関係になる。

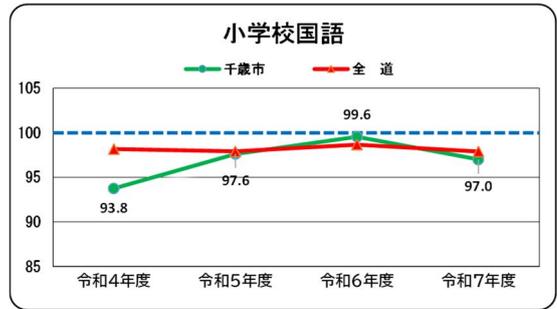
IRT バンド	1	2	3	4	5
IRT スコア範囲	~350	350~450	450~550	550~650	650~

(3) 小学校国語

平均正答率は、今回、全国との差が広がり、前回の「同様」から「ほぼ同様（下位）」という結果となった。区別別では、知識・技能「言葉の特徴・使い方」、知識・技能「我が国の言語文化」、の2つの領域が全国を上回った。

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
千歳市	61.5 93.8	65.6 97.6	67.4 99.6	64.8 97.0
全道	64.4 98.2	65.8 97.9	66.8 98.7	65.4 97.9
全国	65.6 100	67.2 100	67.7 100	66.8 100

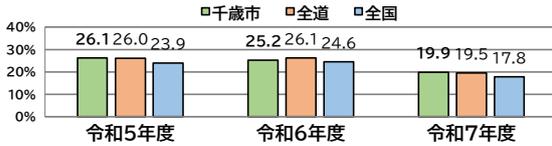


【正答数分布】

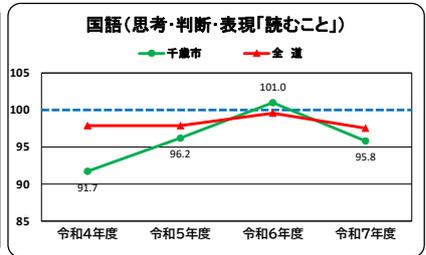
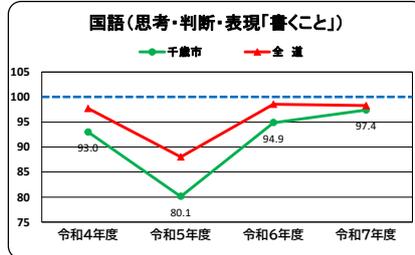
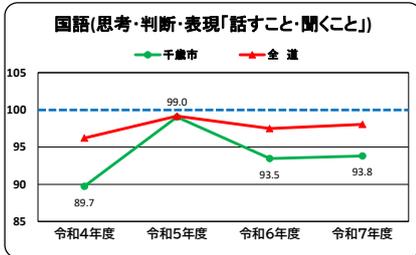
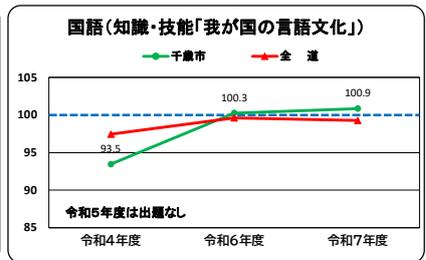
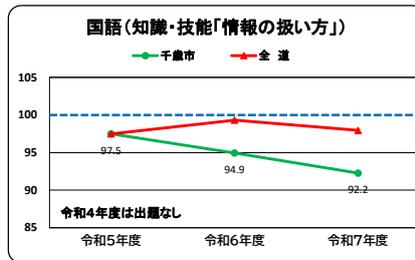
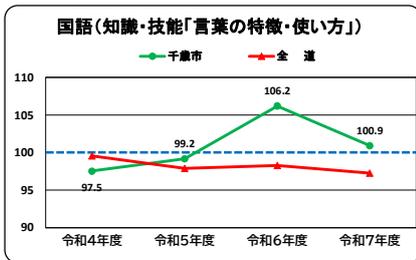


正答数の少ない層の割合は、前回より5.3ポイント減少したが、全国より2.1ポイント多い状況にある。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



【区別正答率の経年変化】

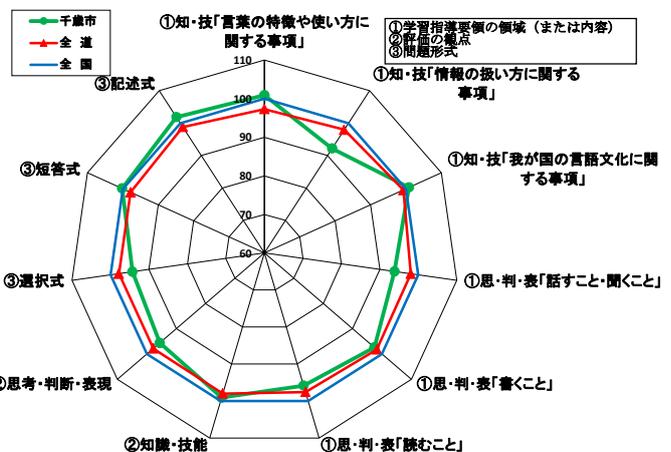


「言葉の特徴や使い方に関する事項」は、漢字を正しく使う問題で全国を上回った。この傾向は前回同様である。「読むこと」は、区分全体で前回は5.2下回ったが、目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかをみる問題が全国の上回った。「話すこと・聞くこと」は、3問すべてが全国の上回った。特に、目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかをみる問題において、全国との差が大きかった。「書くこと」は、前回は2.5上回ったものの、図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる問題が全国の上回った。全問で無解答率が全国を下回った。

評価の観点では、「知識・技能」が前回は3.9、全国を0.7下回り、「思考・判断・表現」が前回は1.4、全国を2.8下回った。

問題形式では、短答式、記述式が全国を上回った。選択式が前回及び全国を下回った。

【区別集計結果】

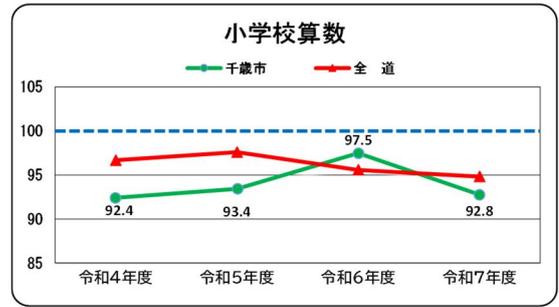


(4) 小学校算数

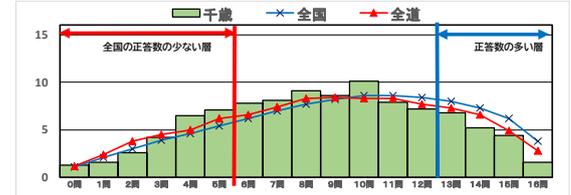
平均正答率は、今回、全国との差が広がり、前回の「ほぼ同様（下位）」から「やや低い」となった。「データの活用」領域で前回は上回った。「測定」「変化と関係」は全国との差が大きい。

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
千歳市	58.4 92.4	58.4 93.4	61.8 97.5	53.8 92.8
全 道	61.1 96.7	61 97.6	60.6 95.6	55.2 95.2
全 国	63.2 100	62.5 100	63.4 100	58 100



【正答数分布】

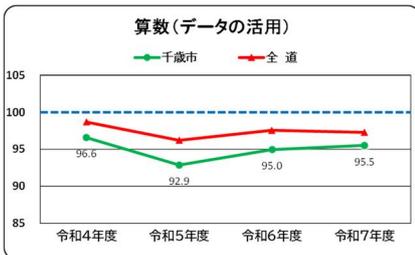
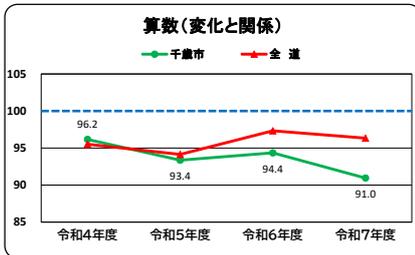
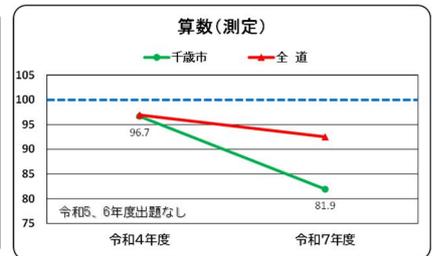
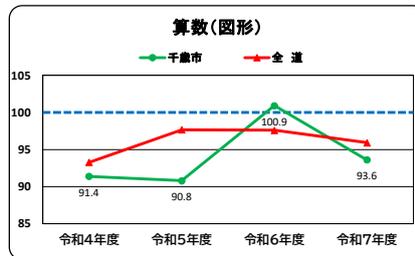
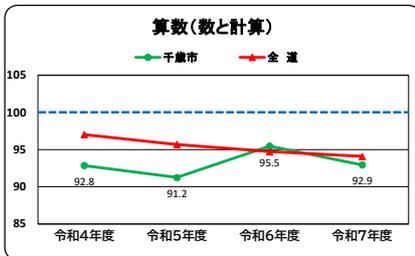


正答数の少ない層の割合は、前回より1.3ポイント増加した。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

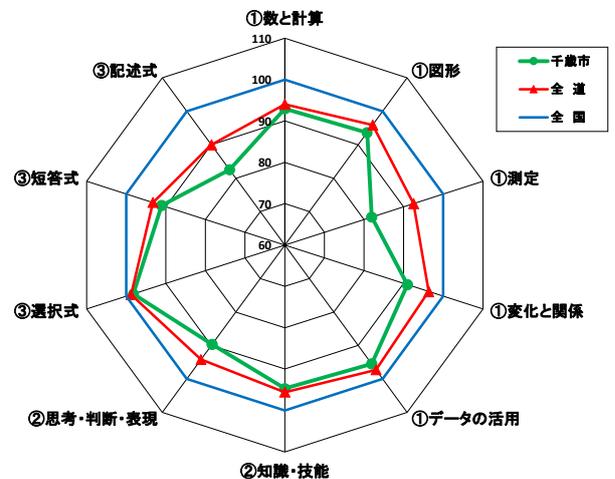


【区別正答率の経年変化】



「数と計算」は、全国を上回る問題が1問あったものの、記述式の2問の正答率が低く、領域全体では全国との差を縮めることができなかった。「図形」は、角の大きさについて理解しているかどうかをみる問題で全国の正答率を上

【区別集計結果】



回ったが、台形の意味や性質について理解しているかどうかをみる問題、平行四辺形の性質を基にコンパスを用いて平行四辺形を作図することができるかどうかをみる問題は全国との差が大きく、領域全体で前年を下回った。「測定」は2問とも全国を大きく下回り、全国との差が最も大きい領域となった。「変化と関係」は、3問すべてが全国を下回り、領域全体で全国との差が広がった。「データの活用」は、前回は上回った。全国を上回る問題が2問あり、全国との差を縮めたが、伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できるかどうかをみる問題の正答率が低かった。全問で無解答率が全国を下回った。

評価の観点では、前回改善が見られた「思考・判断・表現」であるが、今回は全国との差が再び広がった。「知識・技能」についても全国との差が広がる結果となった。

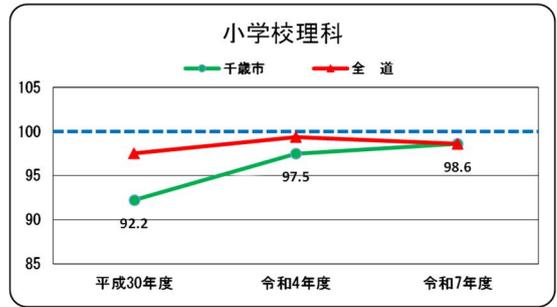
問題形式では、前回大幅な改善が見られた短答式と記述式であるが、今回は全国との差が再び広がった。選択式は、全国正答率との差を縮めている。

(5) 小学校理科

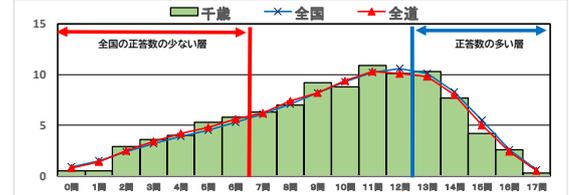
平均正答率は、今回、全国との差が縮まり、前回の「ほぼ同様（下位）」から「同様」となった。「生命」領域は全国平均を上回った。「地球」領域は2回連続で前回を上回った。

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	平成30年度	令和4年度	令和7年度
千歳市	55.6 92.2	61.7 97.5	56.3 98.6
全道	58.8 97.5	62.9 99.4	56.3 98.6
全国	60.3 100	63.3 100	57.1 100

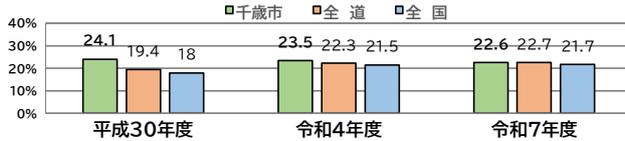


【正答数分布】

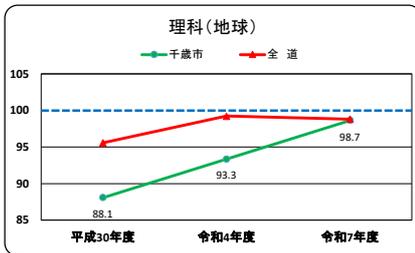
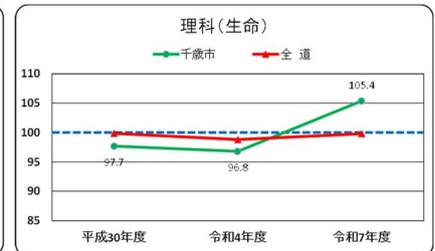
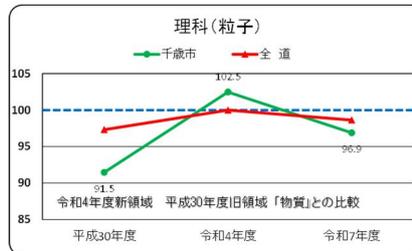
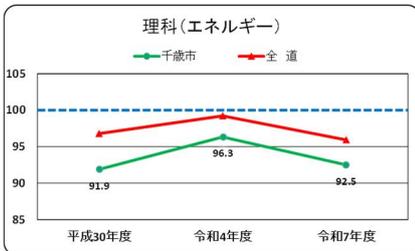


正答数の少ない層の割合は、前回より0.9ポイント減少した。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

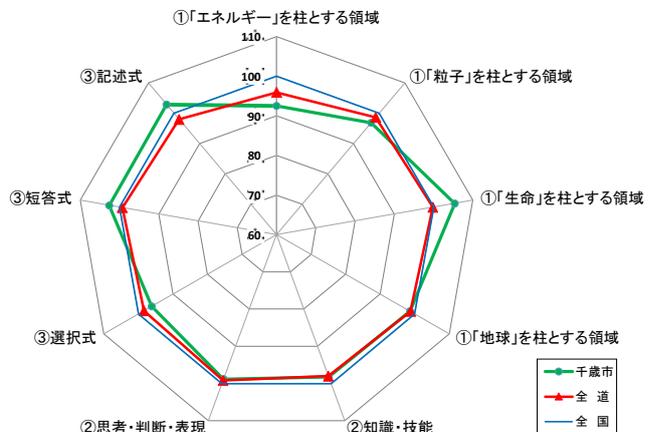
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



【区別正答率の経年変化】



【区別集計結果】



「エネルギー」は、すべての問題が全国を下回り、課題が見られる領域となった。電気の回路の作り方について、実験の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる問題の正答率が低かった。「粒子」は、1問が全国を上回ったが、領域全体では全国を下回った。「水は温まると体積が増える」を根拠に、海面水位の上昇した理由を予想し、表現することができるかどうかをみる選択式問題の正答率が全国を下回った。「生命」は、へチマに関する問題（4問）のうち、3問が全国を上回り、領域全体で全国を大きく上回った。発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができるかどうかをみる思考・判断・表現の問題の正答率が全国を上回った。「地球」は、赤玉土の粒の大きさによる水のみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる記述式問題の正答率が全国を上回り、領域全体では全国平均との差を縮めた。全問で無解答率が全国を下回った。

評価の観点では、「思考・判断・表現」が前回を上回り、全国との差を縮めた。前回、全国を上回った「知識・技能」であるが、今回は全国を下回った。

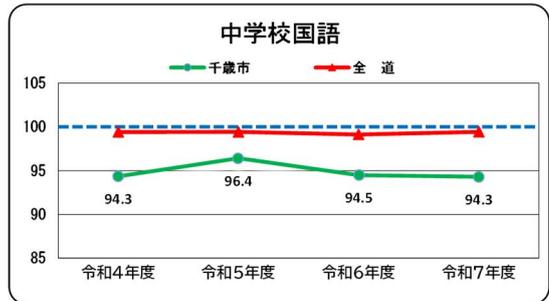
問題形式では、短答式と記述式が全国平均を上回った。特に、記述式は前回より大幅な改善が見られた。選択式は、全国平均との差を縮めることができなかった。身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いているかどうかをみる問題の正答率が約10%と極めて低く、選択式全体の成績を押し下げた。

(6) 中学校国語

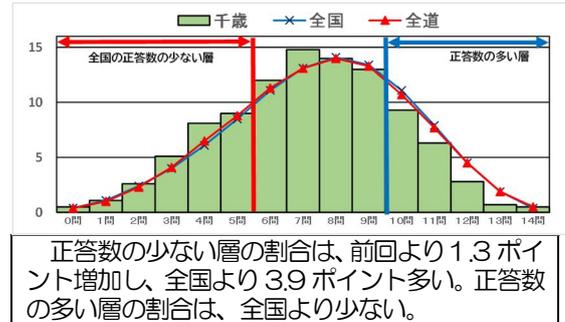
平均正答率は、前回と同様「やや低い」の状況にとどまった。区分別では、知識・技能「言葉の特徴や使い方に関する事項」が全国を上回り、思考・判断・表現「読むこと」が前回を上回り、全国との差を縮めた。

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

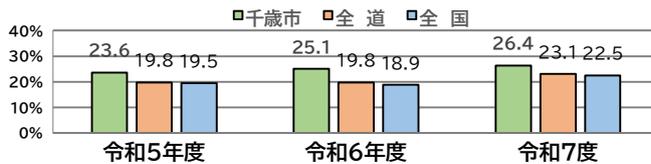
	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
千歳市	65.1 94.3	67.3 96.4	54.9 94.5	51.2 94.3
全道	68.6 99.4	69.4 99.4	57.6 99.1	54.0 99.4
全国	69 100	69.8 100	58.1 100	54.3 100



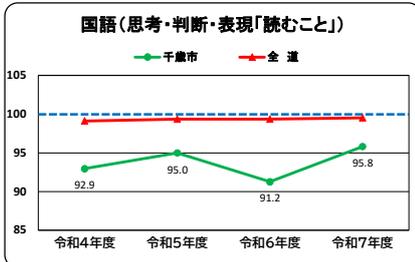
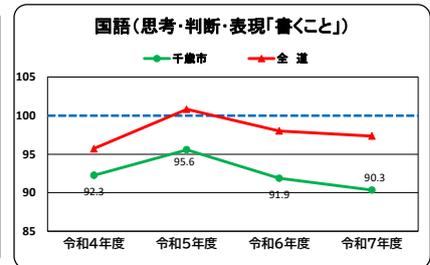
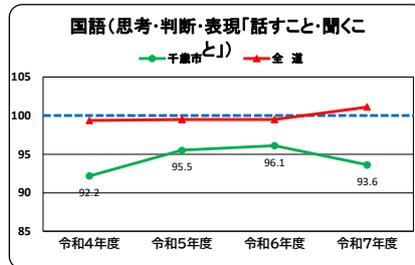
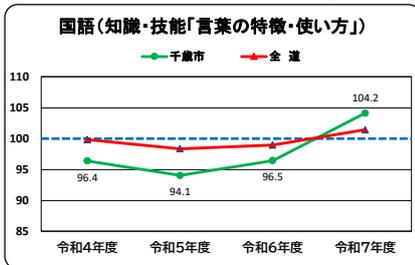
【正答数分布】



【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】

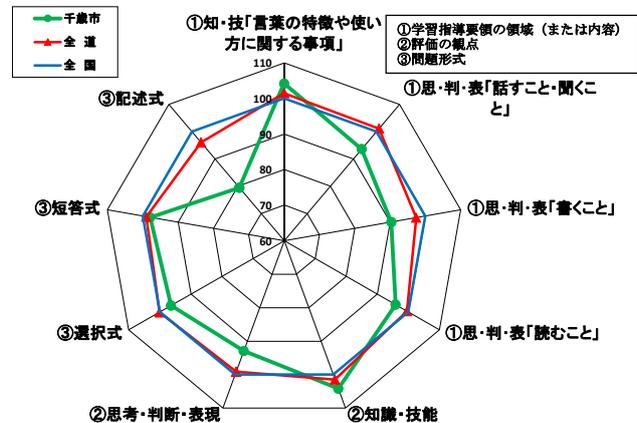


【区分別正答率の経年変化】



「情報の扱い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」の出題がなかった。

【区分別集計結果】



「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、文脈に即して漢字を正しく使うことができるかどうかをみる問題と事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる問題の正答率が全国を上回った。「話すこと・聞くこと」は、4問中3問が全国を下回った。資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる問題の正答率が低かった。「書くこと」は、すべての問題が全国を下回り、4領域の中で全国との差が最も大きかった。特に、記述式問題である2つの問題、読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる問題、読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる問題の正答率が低かった。「読むこと」もすべての問題が全国を下回った。特に、読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる記述式問題の正答率が低かった。

無解答率が全国平均を上回った問題は5問あった。すべてが「思考・判断・表現」で、そのうち3問が記述式問題であった。

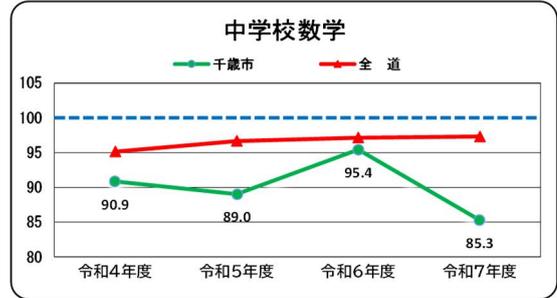
評価の観点では、「知識・技能」が全国平均を上回り、「思考・判断・表現」は全国との差が拡大した。問題形式では、選択式、短答式が前回を上回ったが、記述式が前回は4.9ポイント下回った。

(7) 中学校数学

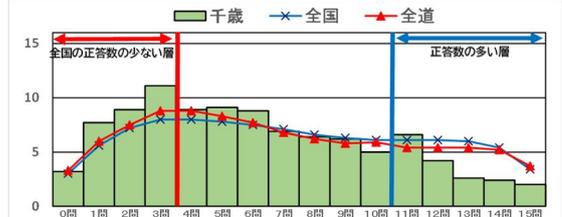
平均正答率は、今回、全国との差が大きくなり、前回の「ほぼ同様（下位）」から「相当低い」の状況となった。すべての領域で前回を下回った。特に、「データの活用」は全国との差が大きくなった。

【平均正答率】 上段：平均正答率、下段：全国平均を100とした指数

	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
千歳市	45.4 89.0	50.1 95.4	50.1 95.4	41.2 85.3
全道	49.3 96.7	51.0 97.1	51.0 97.1	46.7 96.7
全国	51.0 100	52.5 100	52.5 100	48.3 100



【正答数分布】

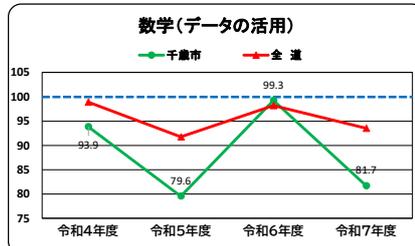
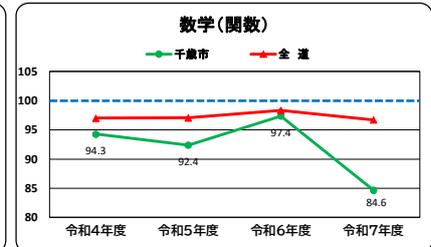
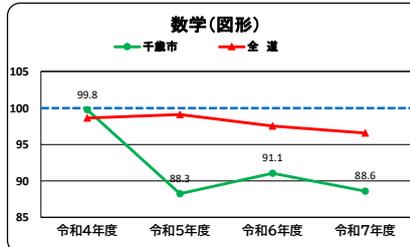
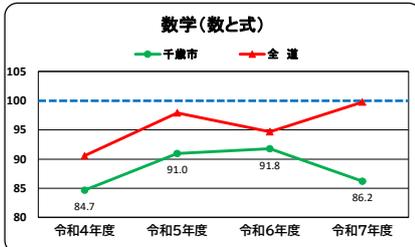


正答数の少ない層の割合は、前回より9.5ポイント増え、全国より7.1ポイント多い状況である。正答数の多い層の割合は、全国より少ない状況となっている。

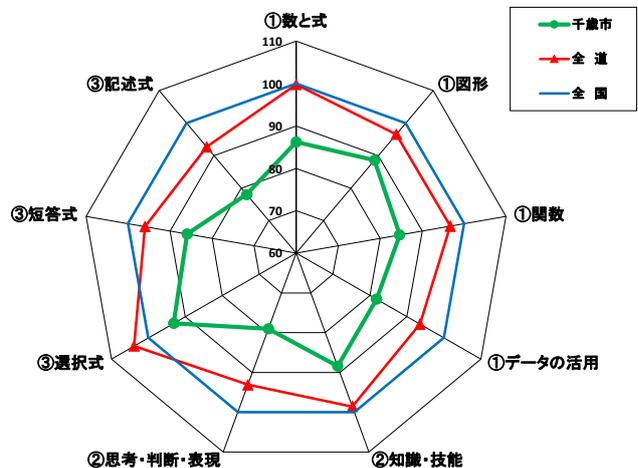
【全国の「正答数の少ない層」と同じ範囲に含まれる児童の割合】



【区分別正答率の経年変化】



【区分別集計結果】



すべて問題の正答率が70%に届かず、全国を下回った。すべての領域が前回を下回り、全国平均との差が広がった。無解答率が全国を下回った問題は3問に留まった。

「数と式」は、記述式問題において全国との差が大きかった。倍数の和について、目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができるかどうかをみる問題の正答率が低かった。必ず起こる事柄の確率についての問題の正答率が高く、素数の意味についての問題は全国との差が最も小さかった。「図形」は、構想に基づいて平行四辺形であることを証明する記述式問題で全国との差が大きかったが、4領域の中では最も全国との差が小さかった。「関数」は、一次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合を基に、 x の増加量に対する y の増加量を求めることができるかどうかをみる問題で全国との差が大きかった。「データの活用」は、相対度数の意味を理解しているかどうかをみる短答式問題で全国との差が最も大きかった。

評価の観点では、「知識・技能」に比べて「思考・判断・表現」が全国との差が大きい傾向が続いている。

記述式問題は無解答率が高く30%を超えた。選択式、短答式と比べて平均正答率が最も低く、全国平均との差が最も大きかった。

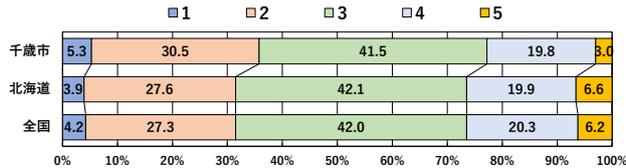
(8) 中学校理科

IRT スコアは、全国を下回った。平均正答率について、「粒子」は全国を上回った。「エネルギー」と「生命」は2回連続で前回を下回った。

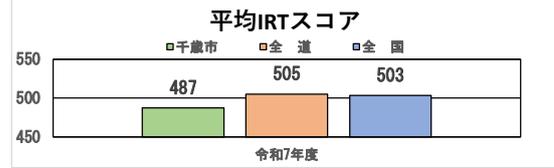
【IRTスコア】 上段：IRTスコア 下段：全国平均を100とした指数

	平均IRTスコア	パーセンタイル値				
		10%	25%	50%	75%	90%
千歳市	487	356	410	479	556	618
	96.8	98.6	97.2	96.8	97.2	94.8
全道	505	364	423	493	573	655
	100.4	100.8	100.2	99.6	100.2	100.5
全国	503	361	422	495	572	652
	100	100	100	100	100	100

【IRTバンド分布】



【平均IRTスコア】



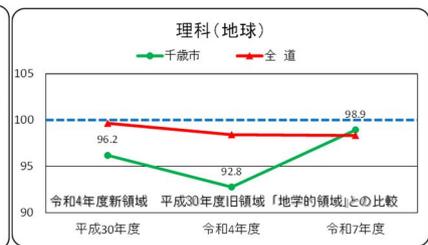
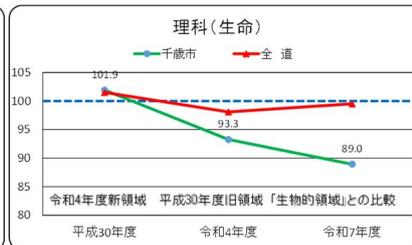
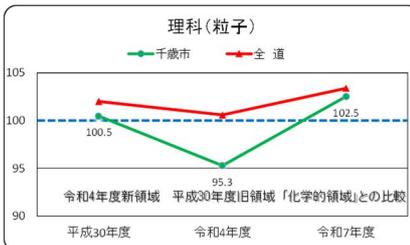
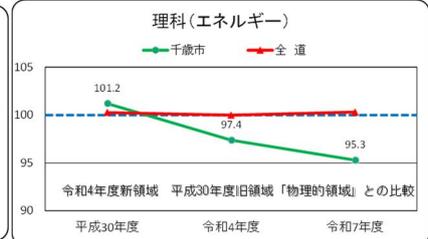
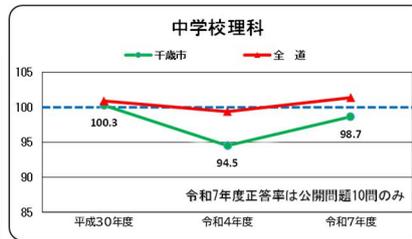
IRTスコアが低い層の割合は全国より多く、IRTスコアが高い層の割合は全国より少ない状況となっている。中央値（50%のスコア）は全国より低くなっている。

IRTバンド分布では、基準の「3」と「4」の割合は全国同様であるが、最も高い「5」が全国より3.2ポイント少ない。「2」が3.2ポイント、「1」が1.1ポイント、全国より多くなっている。

以下、公開問題の結果について示す。

【正答率の経年変化】

	平成30年度	令和4年度	令和7年度
千歳市	66.3	46.6	49.3
	100.3	94.5	98.7
全道	66.7	49	50.7
	100.9	99.4	101.4
全国	66.1	49.3	50
	100	100	100



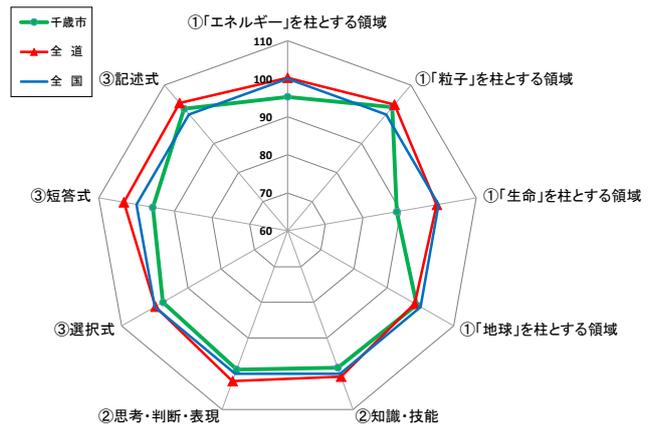
前々回、全国を上回っていた「エネルギー」「生命」が連続して前回を下回った。特に、「生命」は全国を大きく下回っている状況にある。小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造について学習する場面において、共通性と多様性を見方を働かせながら比較し、多面的、総合的に分析して解釈することができるかどうかをみる問題の正答率が全国を大きく下回った。「エネルギー」では設定した【仮説】が正しい場合の実験結果の予想を選択する問題の正答率が全国を大きく下回った。全国を上回った「粒子」では、身の回りの事象から生じた疑問や見いだした問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる問題の正答率が全国を上回った。

「地球」は、共通問題である地層の性質から、水が染み出る場所を判断し、その場所を選択する問題の正答率が影響し、全国平均に届かなかった。

評価の観点では、「知識・技能」「思考・判断・表現」のいずれも全国を下回ったものの、前回より3ポイント以上増加し、全国との差を縮めている。

問題形式では、選択式が前回を上回ったが、全国に届かなかった。短答式は、前回を下回り、全国も下回った。記述式は前回を大きく上回り、全国も上回った。問題を解決するための課題を設定できるかどうかをみる問題、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目した振り返りを表現できるかどうかをみる問題は正答率が高く、問題解決型の学習過程が定着していることがうかがえる結果となった。

【区別集計結果】



3 児童生徒質問調査の結果

令和7年度の調査では、「基本的生活習慣等」の1項目、「学習習慣・学習環境等」の2項目、「学習に対する興味・関心や授業の理解度等」の国語の5項目、算数・数学の3項目、小学校理科の2項目、中学校理科の7項目が新たな調査項目となっている。

今回も、昨年度に引き続き4つの観点で示す。各観点のレーダーチャートでは、肯定的に捉えている児童生徒の割合を全国の割合と比較して示している。「標準的」なレベル以外の項目および昨年度と比較し大きな変化があった項目について、その推移を示した。

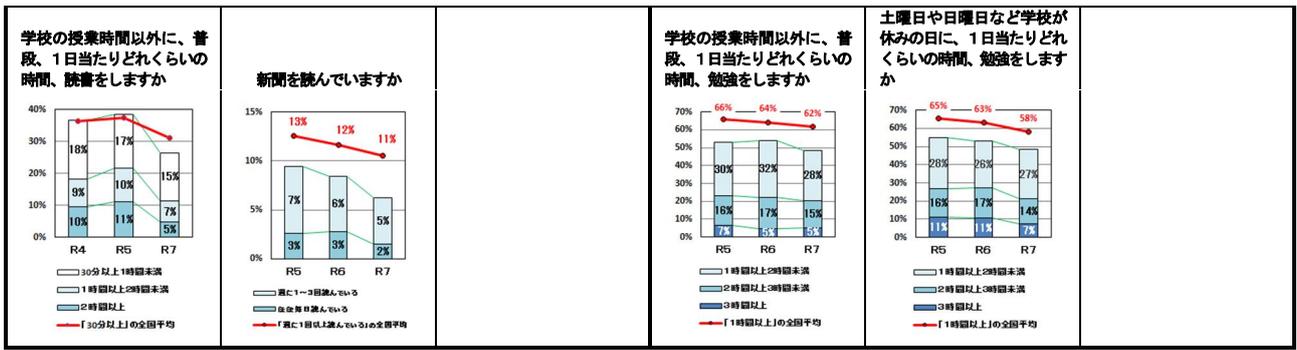
(1) 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等

小学校	中学校				
<p>挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等(小学校)</p>	<p>挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等(中学校)</p>				
<p>□11項目中8項目が「標準的」で、3項目が全国平均より「やや低い」状況にある。前年度と比較すると、3項目が大きく低下している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる」「学校に行くのは楽しいと思う」「自分と違う意見について考えるのは楽しい」の3項目である。各項目とも肯定的に捉えている児童の割合は減少傾向にあり、「当てはまる」という回答も全国平均を下回っている。 	<p>□11項目中10項目が「標準的」で、1項目が全国平均より「やや低い」状況にある。前年度と比較すると、1項目が大きく向上し、1項目が大きく低下している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○大きく向上したのは、「将来の目標や夢を持っている」の1項目で、肯定的に捉えている生徒の割合は増加傾向にある。 ●全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「学校に行くのは楽しいと思う」の1項目で、肯定的に捉えている生徒の割合は前回よりやや減少しており、「当てはまる」という回答も全国平均を下回っている。 				
<p>困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる</p>	<p>学校に行くのは楽しいと思う</p>	<p>自分と違う意見について考えるのは楽しい</p>	<p>将来の夢や目標を持っている</p>	<p>学校に行くのは楽しいと思う</p>	

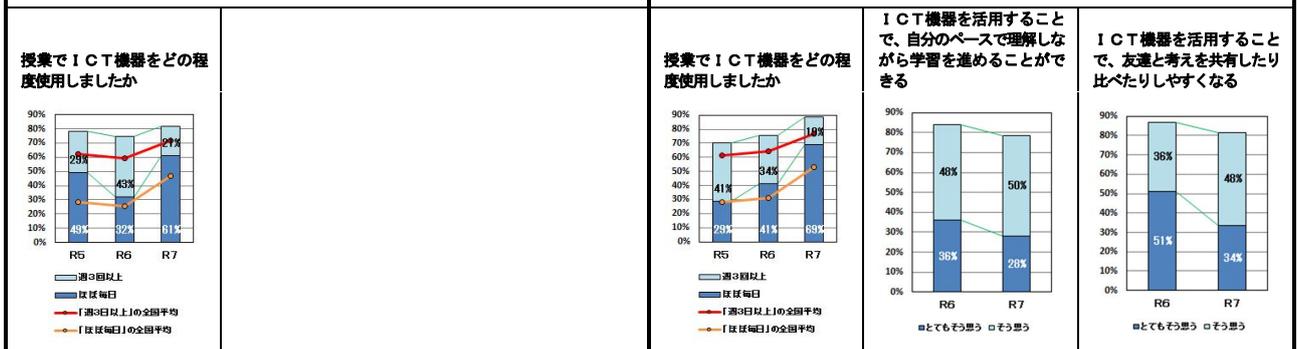
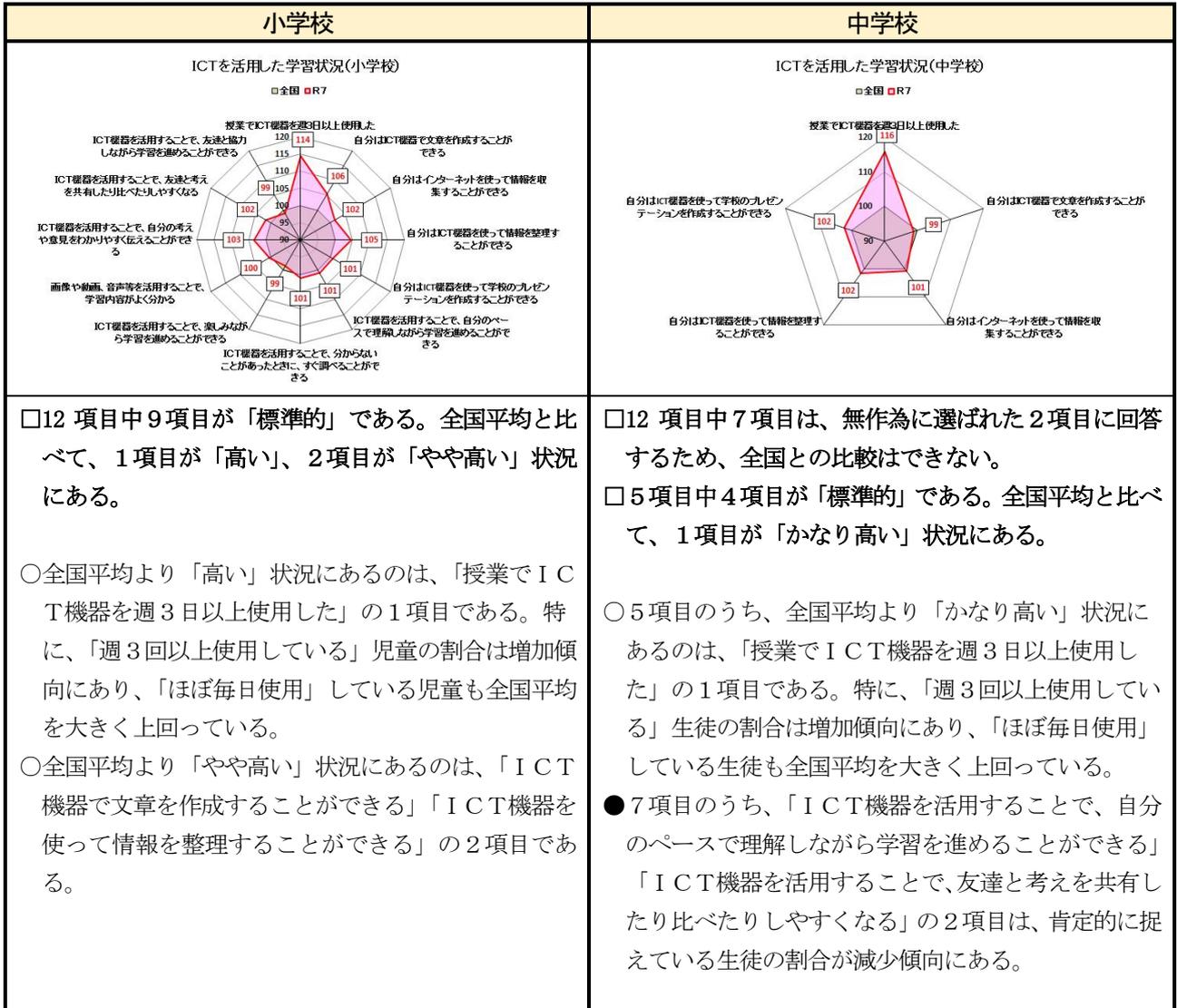
(2) 学習習慣、学習環境、ICTを活用した学習状況等

① 学習習慣、学習環境等

小学校	中学校				
<p>学習習慣、学習環境等(小学校)</p>	<p>学習習慣、学習環境等(中学校)</p>				
<p>□ 9項目中2項目が「標準的」である。全国平均と比べて、3項目が「やや低い」、1項目が「低い」、3項目が「かなり低い」状況にある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上ICT機器を勉強のために使っている」「学校が休みの日に1日当たり1時間以上勉強をする」「読書が好き」の3項目である。特に、「学校が休みの日に1時間以上勉強する」「読書が好き」という児童の割合は大きく減少し、低下傾向にある。 ● 全国平均より「低い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上勉強をする」の1項目である。1時間以上勉強をしている児童の割合は大きく減少し、低下傾向にある。 ● 全国平均より「かなり低い」状況にあるのは、「学習塾の先生や家庭教師の先生に教わっている」「学校の授業時間以外に1日当たり30分以上読書をしている」「新聞を週に1回以上読んでいる」の3項目である。特に、30分以上読書をしている、新聞を週1回以上読んでいる児童の割合は大きく減少し、低下傾向にある。 	<p>□ 9項目中2項目が「標準的」である。全国平均と比べて、1項目が「かなり高い」、1項目が「高い」、1項目が「低い」、4項目が「かなり低い」状況にある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 全国平均より「かなり高い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり30分以上読書をしている」の1項目である。30分以上読書をしている生徒の割合は前回とほぼ同様である。 ○ 全国平均より「高い」状況にあるのは、「家には26冊以上の本がある」の1項目である。家に26冊以上の本がある生徒の割合は前回とほぼ同様である。 ● 全国平均より「低い」状況にあるのは、「新聞を週に1回以上読んでいる」の1項目である。新聞を週に1回以上読んでいる生徒の割合は前回とほぼ同様である。 ● 全国平均より「かなり低い」状況にあるのは、「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上勉強をする」「学校が休みの日に1日当たり1時間以上勉強をする」「学校の授業時間以外に1日当たり1時間以上ICT機器を勉強のために使っている」「学習塾の先生や家庭教師の先生に教わっている」の4項目である。特に、「普段も休みの日も1時間以上勉強する」生徒の割合は減少し、低下傾向にある。 				
<p>土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか</p>	<p>読書は好きですか</p>	<p>学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか</p>	<p>学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか</p>	<p>あなたの家には、およそどれくらいの本がありますか</p>	<p>新聞を読んでいますか</p>



② ICTを活用した学習状況



(3) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

小学校	中学校
<p>主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善(小学校)</p> <p>自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している</p> <p>授業や学校生活では友達や隣の人を大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる</p> <p>先生は授業やテストで間違えたとつや理解していないところについて分かるまで教えてくれていると思う</p> <p>授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり生かしたりすることができると思う</p> <p>学習した内容について分かった点やよくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができる</p> <p>課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいる</p> <p>各教科などで学んだことを生かしながら自分の考えをまとめる活動を行っている</p> <p>授業は自分に合った教え方、教材、学習時間などになっている</p> <p>授業は自分で合った教え方、教材、学習時間などになっている</p> <p>学習した内容について分かった点やよくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができる</p> <p>学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づき上げることができる</p>	<p>主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善(中学校)</p> <p>自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している</p> <p>授業や学校生活では友達や隣の人を大切にしてお互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる</p> <p>先生は授業やテストで間違えたとつや理解していないところについて分かるまで教えてくれていると思う</p> <p>授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり生かしたりすることができると思う</p> <p>学習した内容について分かった点やよくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができる</p> <p>課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでいる</p> <p>各教科などで学んだことを生かしながら自分の考えをまとめる活動を行っている</p> <p>授業は自分に合った教え方、教材、学習時間などになっている</p> <p>授業は自分で合った教え方、教材、学習時間などになっている</p> <p>学習した内容について分かった点やよくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができる</p> <p>学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づき上げることができる</p>
<p>□ 9項目中全項目が「標準的」な状況にあるが、昨年度より低下傾向にある。</p> <p>● 前回より大きく低下傾向にあるのは、「学習した内容について分かった点やよくわからなかった点を見直し次の学習につなげることができる」「授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり生かしたりすることができると思う」の2項目である。どちらも、肯定的に捉えている児童の割合が昨年度より減少している。</p>	<p>□ 9項目中全項目が「標準的」な状況にあり、昨年度とほぼ同様の状況となっている。</p> <p>○ 前回より大きく向上しているのは、「自分の考えがうまく伝わるよう資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している」の1項目で、肯定的に捉えている生徒の割合は増加傾向にある。</p>
<p>学習した内容について、分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができる</p> <p>授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思う</p>	<p>自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか</p>

(4) 学習に対する興味・関心や授業の理解度等

① 国語

小学校	中学校
<p>国語の学習に対する興味・関心や授業の理解度等(小学校)</p> <p>国語の授業で、目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見付けている</p> <p>国語の授業で、目的に応じて、簡単に書いたりぐちゃぐちゃに書いたりするなどで、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いている</p> <p>国語の授業で、先生は、あなたの学習のまできいせいとことばを伝え、どうしたらうまくできるよになるかを教えてくれる</p> <p>国語の授業で、先生は、あなたの良いところや、前よりもできるようになったところなどを伝えてくれる</p> <p>国語の勉強は得意だ</p> <p>国語の勉強が好きだ</p> <p>国語の授業の内容がよくわかる</p> <p>国語の授業で学んだことは、将来、社会に出たときに役に立つ</p>	<p>国語の学習に対する興味・関心や授業の理解度等(中学校)</p> <p>国語の授業で、文章を書いた後、読み手の立場に立って読み返し、語句の読み方や使いか、文や句の長さ、語彙などが適切かどうかを確かめて文章を整えている</p> <p>国語の授業で、文章を読み、その文章の構成や展開、どのような効果があるのかについて、根拠を明確に考えている</p> <p>国語の授業で、先生は、あなたの学習のまできいせいとことばを伝え、どうしたらうまくできるよになるかを教えてくれる</p> <p>国語の授業で、先生は、あなたの良いところや、前よりもできるようになったところなどを伝えてくれる</p> <p>国語の勉強は得意だ</p> <p>国語の勉強が好きだ</p> <p>国語の授業の内容がよくわかる</p> <p>国語の授業で学んだことは、将来、社会に出たときに役に立つ</p>

□ 8項目中5項目が「標準的」である。全国平均と比べて、1項目が「やや高い」、1項目が「やや低い」、1項目が「低い」状況にある。

○ 全国平均より「やや高い」状況にあるのは、「目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけている」の1項目である。

● 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「国語の勉強は得意だ」の1項目である。

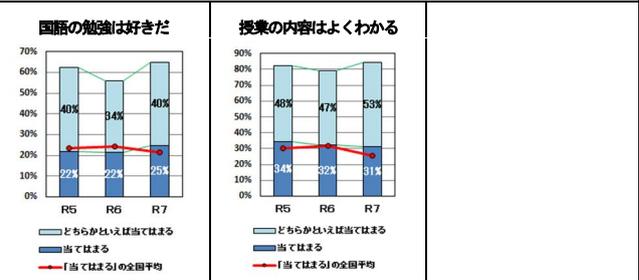
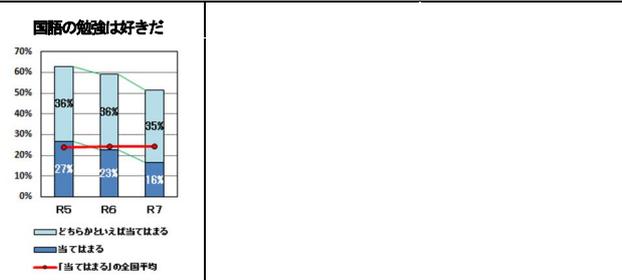
● 全国平均より「低い」状況にあるのは、「国語の勉強は好きだ」の1項目で、肯定的に捉えている児童は減少傾向にあり、今年度は「当てはまる」と回答した児童も全国平均を下回っている。

□ 8項目中3項目が「標準的」である。全国平均と比べて、1項目が「かなり高い」、2項目が「高い」、2項目が「やや高い」状況にある。

○ 全国平均より「かなり高い」状況にあるのは、「国語の勉強は得意だ」の1項目である。

○ 全国平均より「高い」状況にあるのは、「国語の勉強は好きだ」「国語の授業の内容はよくわかる」の2項目である。どちらも肯定的に捉えている生徒は増加傾向にあり、「当てはまる」という回答も全国平均を上回っている。

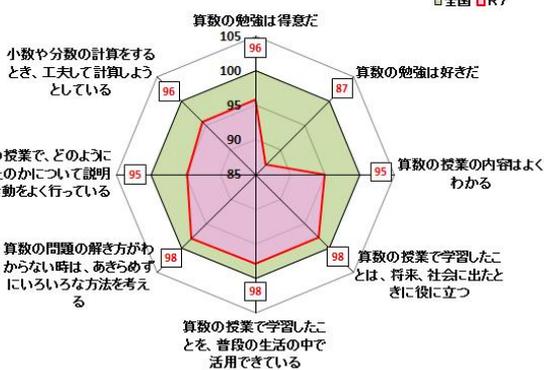
○ 全国平均より「やや高い」状況にあるのは、「先生は、あなたのよいところや、前よりもできるようになったところはどこかを伝えてくれる」「文章を書いた後に、読み手の立場に立って読み直し、語句の選び方や使い方、分野段落の長さ、語順などが適切かどうかを確かめて文章を整えている」の2項目である。



② 算数・数学

小学校

算数の学習に対する興味・関心や授業の理解度等

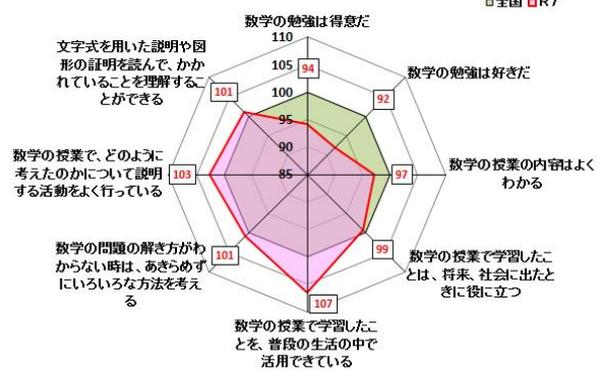


□ 8項目中5項目が「標準的」である。全国平均と比べて、2項目が「やや低い」、1項目が「低い」状況にある。

● 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「算数の授業の内容はよくわかる」「授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っている」の

中学校

数学の学習に対する興味・関心や授業の理解度等



□ 8項目中5項目が「標準的」である。全国平均と比べて、1項目が「やや高い」、2項目が「やや低い」状況にある。

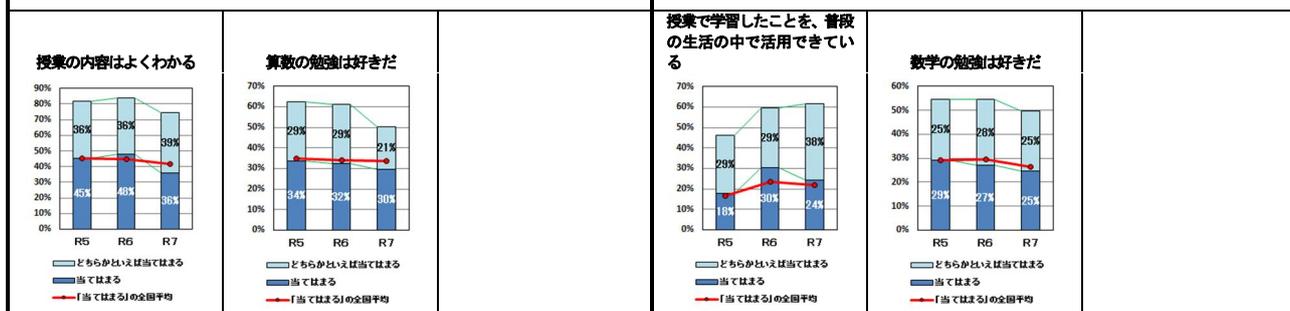
○ 全国平均より「やや高い」状況にあるのは、「数学の授業で学習したことを、普段の生活の中で活用できている」の1項目で、肯定的に捉えている生徒は増

2項目である。特に、「算数の授業の内容はよくわかる」と肯定的に捉えている児童の割合は大きく減少し、「当てはまる」という回答も今年度は全国平均を下回っている。

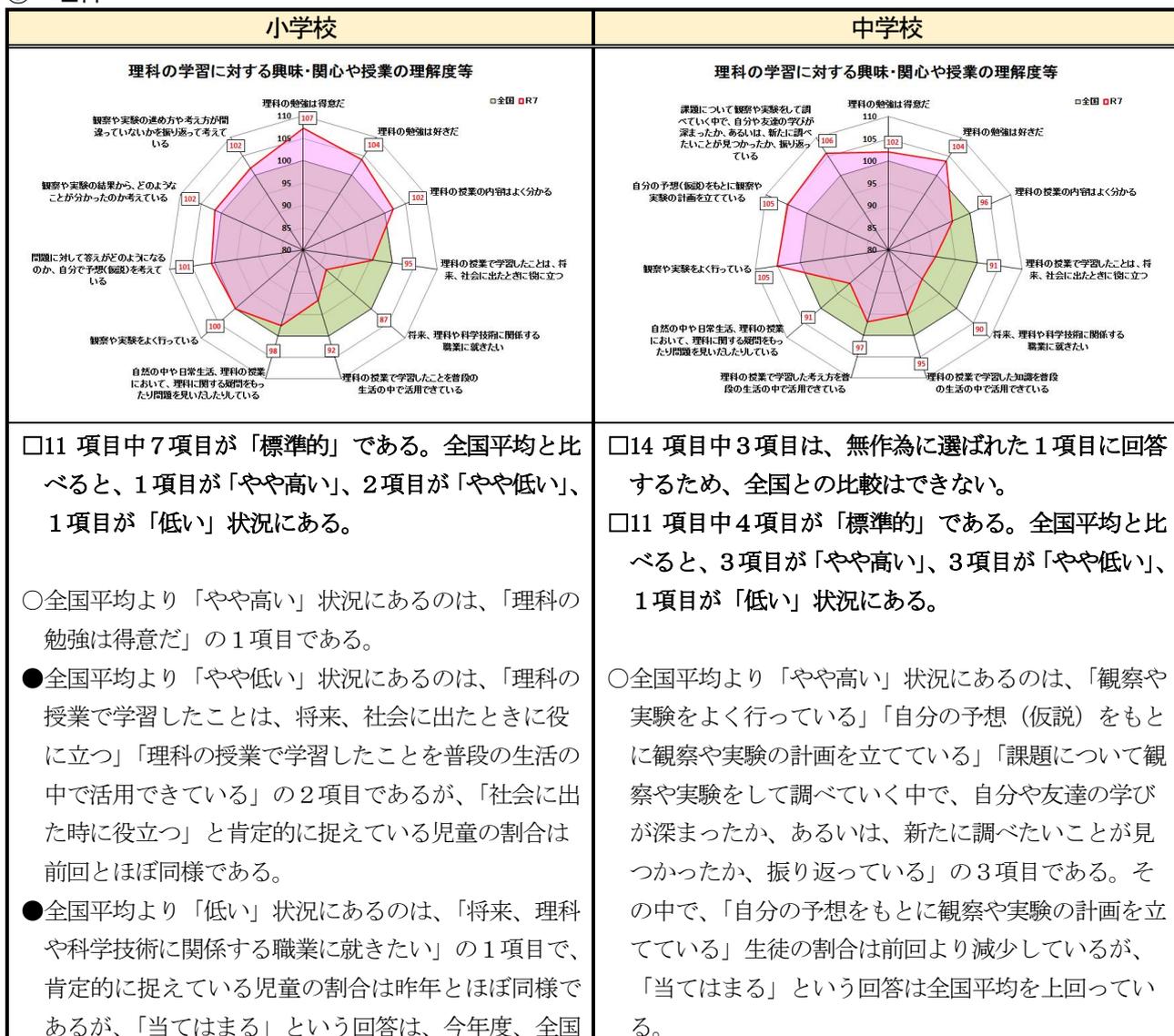
- 全国平均より「低い」状況にあるのは、「算数の勉強は好きだ」の1項目で、肯定的に捉えている児童の割合は大きく減少傾向し、「当てはまる」という回答も今年度は全国平均を下回っている。

加傾向にあるが、「当てはまる」という回答は大きく減少している。

- 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「数学の勉強は得意だ」「数学の勉強は好きだ」の2項目である。特に、「数学の勉強は好きだ」と肯定的に捉えている生徒の割合は、減少傾向にある。



③ 理科



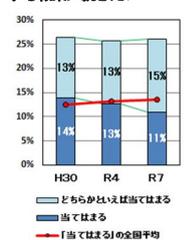
平均を下回っている。

- 全国平均より「やや低い」状況にあるのは、「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」「自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問をもったり問題を見いだしたりしている」の2項目である。社会に出た時に役立つと肯定的に捉えている生徒の割合は前回より若干減少している。理科に関する疑問を持ったり問題を見出したりしている生徒の割合は、前回より大きく減少している。
- 全国平均より「低い」状況にあるのは、「将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたい」の1項目で、肯定的に捉えている生徒の割合は昨年とほぼ同様で、「当てはまる」という回答は全国平均を下回っている。

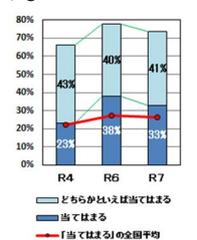
理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ



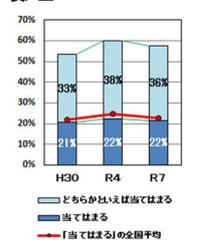
将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたい



自分の予想(仮説)をもとに観察や実験の計画を立てている



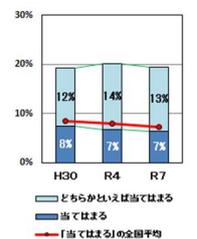
理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ



自然の中や日常生活、理科の授業において、理科に関する疑問をもったり問題を見いだしたりしている



将来、理科や科学技術に関係する職業に就きたい

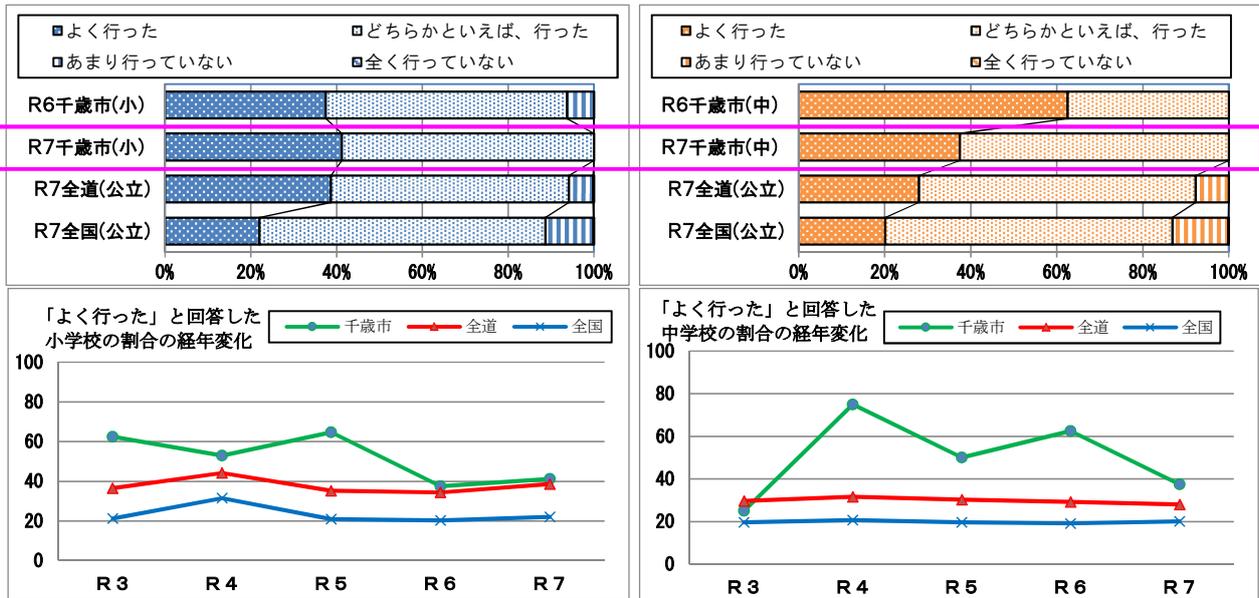


4 学校質問調査の結果

1 千歳市学力向上検討委員会の学校への提言に関して

① 探究型・対話型授業への転換

質問番号 3 3	調査対象学年の児童（生徒）に対して、前年度までに、習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか。
-------------	--



中学校の取組低下を踏まえた継続的な授業改善の推進が必要

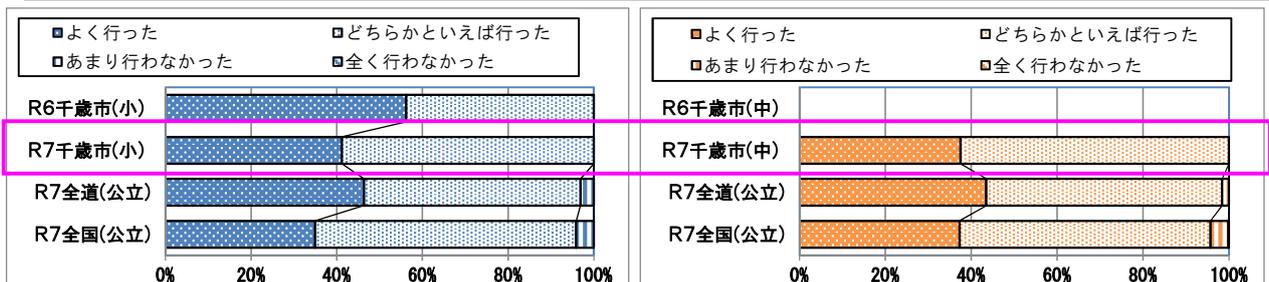
「習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善および工夫」を「よく行った」と回答した学校の割合は、小学校41.2%で全国（22.0%）を上回り、中学校も37.5%で全国（20.1%）を上回った。昨年との比較では、小学校は3.7ポイント上昇した一方、中学校は25.0ポイント下降している。

学習指導要領がめざす「知識・技能の習得」と「思考力・判断力・表現力の育成」には、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められる。市内の全校が取組に肯定的な回答をしているが、中学校の数値の下降からは、組織的な授業改善の継続に課題があると推察される。本市が目指す「探究型・対話型」授業と「習得型・反復型」授業のバランスある推進に向け、各校の取組のさらなる充実が求められる。

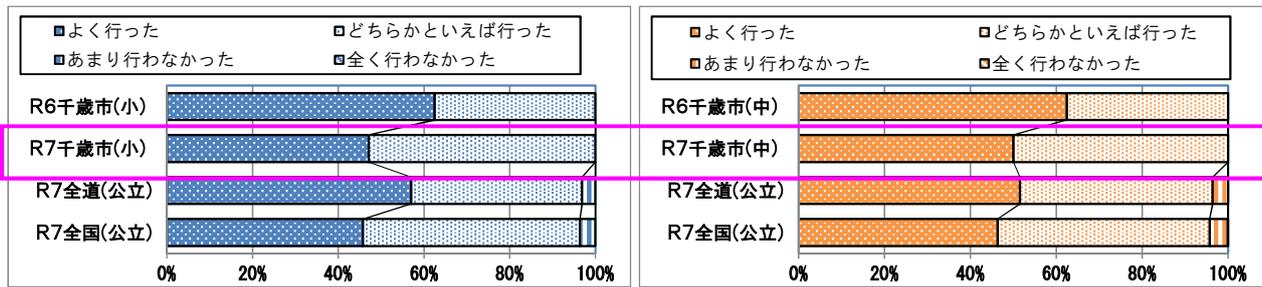
② 読解力・記述力の向上 ～国語、算数・数学の指導

質問番号 小4 3	国語の授業において、前年度までに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書くことができるような指導を行いましたか。
--------------	---

質問番号 中4 4	【新規】国語の授業において、前年度までに、読み手の立場に立って、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるような指導を行いましたか。
--------------	---



質問番号 47	算数(数学)の授業において、問題の答えを求めさせるだけでなく、どのように考え、その答えになったのかなどについて、児童(生徒)に筋道を立てて説明させるような授業を行いましたか。
------------	---



「読解力・記述力」向上には組織的・継続的な指導が不可欠

国語における「(根拠を明確にして)自分の考えを書いたり、表現を工夫したりする授業」「読み手の立場に立って、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えるような指導」について、「よく行った」と回答した小学校は41.2%で、全国(34.9%)を6.3ポイント上回り、中学校は37.5%で全国(37.2%)を0.3ポイント上回った。

また、算数・数学の「問題を解くことに加えて、その根拠を筋道立てて説明させる授業」では、小学校が47.1%で全国(45.7%)を1.4ポイント、中学校が50.0%で全国(46.3%)を3.7ポイント上回っていた。

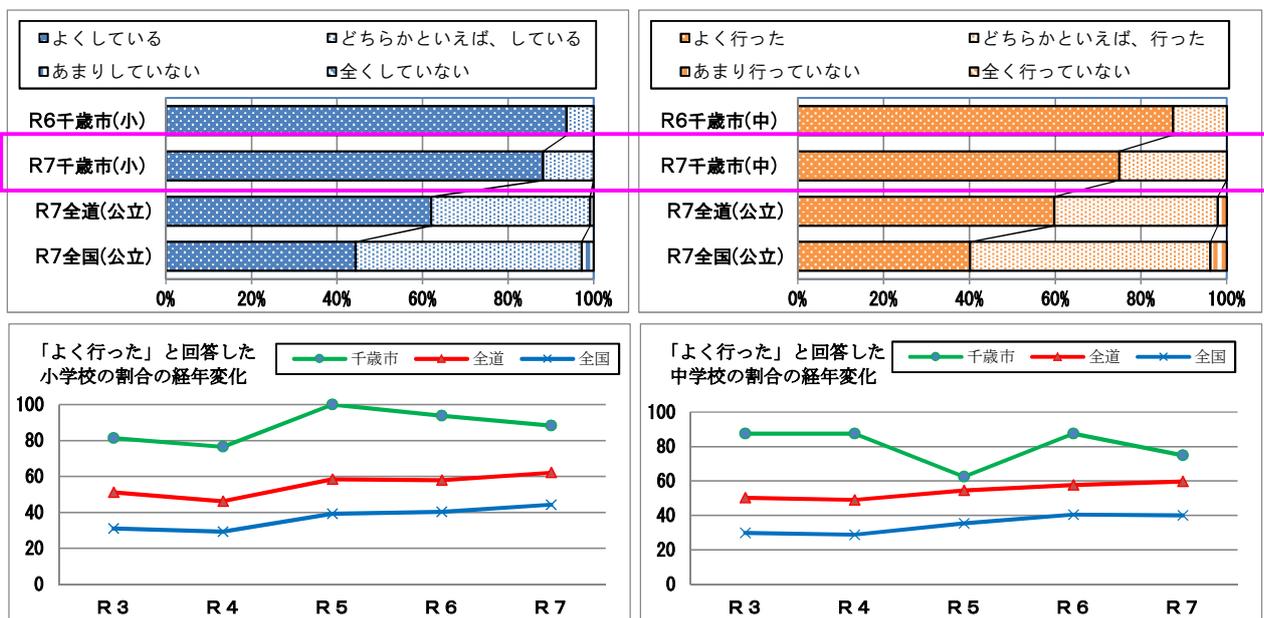
国語・算数(数学)ともに「どちらかといえば行った」を含めると、市内すべての学校で「読解力・記述力」の向上を意識した授業が実施されている状況がうかがえる。

一方で、読解力では問いの意図を正しく捉える力や、複数の資料から必要な情報を的確に取り出す力、記述力では根拠を明示した表現や、条件に応じた理由づけなどが引き続き課題となっている。

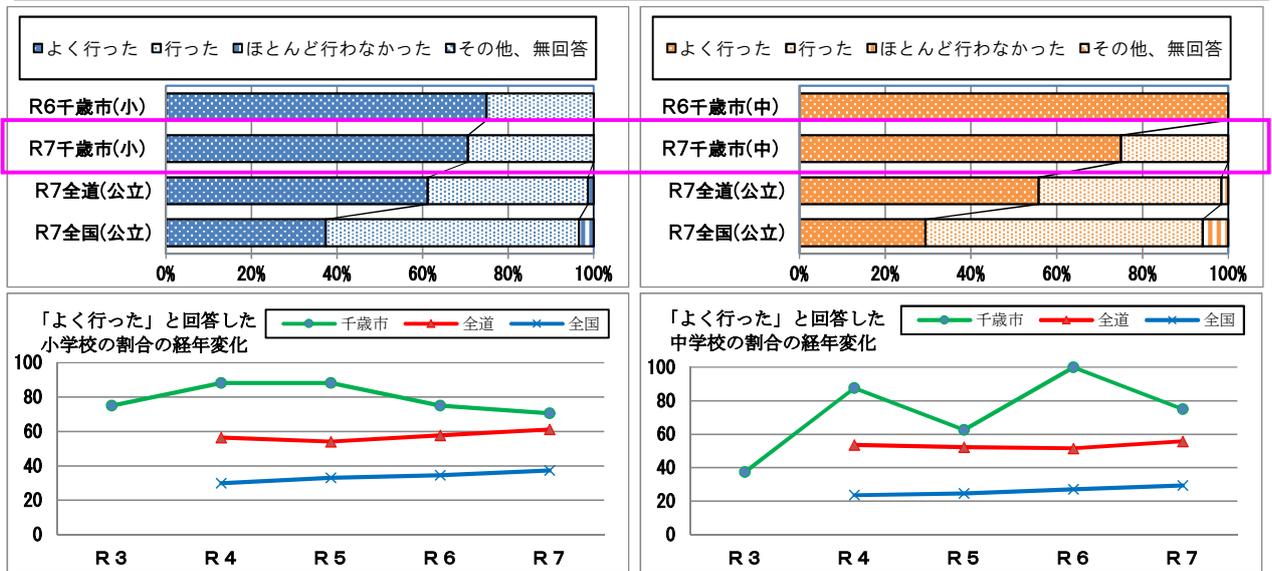
読解力・記述力は短期間で高まるものではなく、全校的な計画のもと、継続的に指導を積み重ねる必要がある。令和7年度に本市で実施した教職員向け研修の成果も踏まえ、今後も児童生徒に記述させる場面や条件の工夫、より深い思考を引き出す対話の機会など、発達段階に応じた組織的・継続的な取組の推進が求められる。

③ 「学校改善プラン」の確実な実行

質問番号 15	児童(生徒)の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか。
------------	---



質問番号 83	令和6年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用しましたか。
------------	--



学校改善プランの活用は進むも、さらなる確実な運用が求められる

「学校改善プラン」による PDCA サイクルの確立について、「よく行った」と回答した割合は小学校 88.2%、中学校 75.0%で、いずれも前回より低下したが、全国（小 44.3%、中 40.1%）を大きく上回っている。「どちらかといえば行った」を含めると、全校で肯定的な回答となっている。

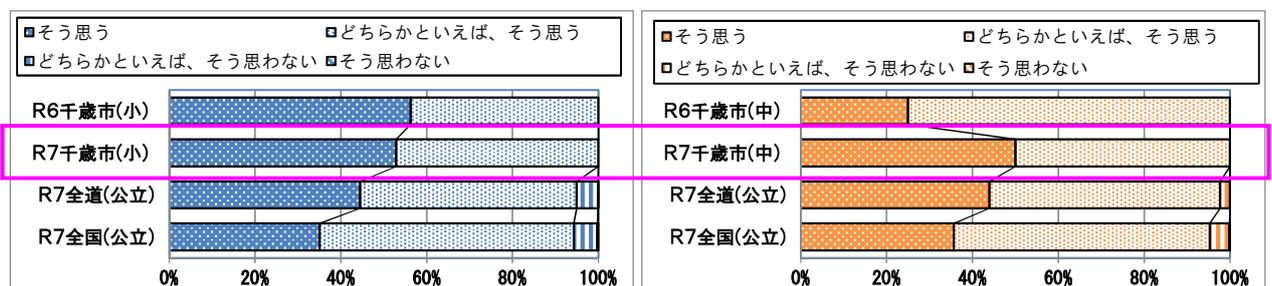
また、「学校改善プラン」の改訂に全国学力・学習状況調査結果を活用したとの回答は、小学校 70.6%、中学校 75.0%であり、こちらも全校で肯定的な傾向が見られた。

全国学力・学習状況調査は、学習指導要領に示された資質・能力の育成を踏まえた出題であるため、短期・中期的な方策や評価指標、手順を明確にした「学校改善プラン」の策定が求められる。

市内の各校では、調査結果を該当学年・教科の改善にとどめず、成果や課題を共有し、組織的な取組が進められていると考えられる。今後は、策定そのものが目的化しないよう留意し、進行管理の徹底と検証・改善サイクルの確実な運用が重要である。

④ ハイパーQ U検査を活用した学年・学級経営の充実

質問番号 28	児童（生徒）は、授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいると思いますか
------------	--



全国を上回る成果と、支持的風土の育成に向けた取組の重要性

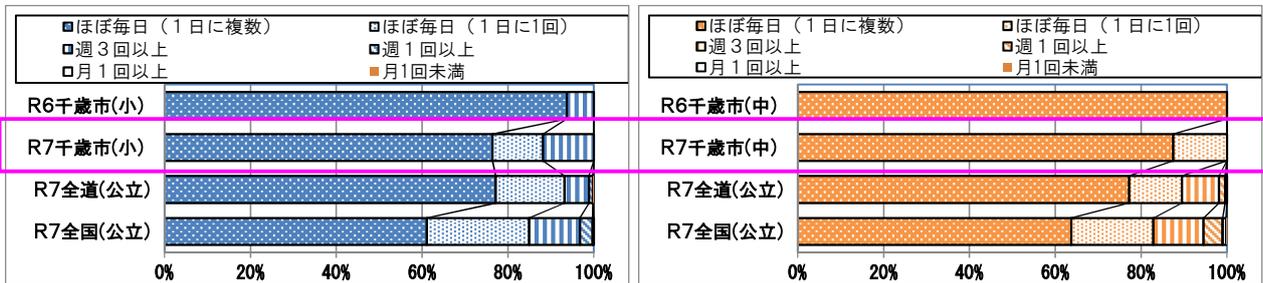
「当てはまる」と回答した割合は小学校 52.9%、中学校 50.0%で、全国（小 35.0%、中 35.6%）を上回っており、「どちらかといえば当てはまる」を含めると、全校で肯定的な回答となっている。

互いを認め合う支持的風土の醸成は、「探究型・対話型」授業の基盤となる集団での学びの充実につながり、自尊感情や自己有用感の向上によって、いじめや不登校の未然防止にも寄与すると考えられる。

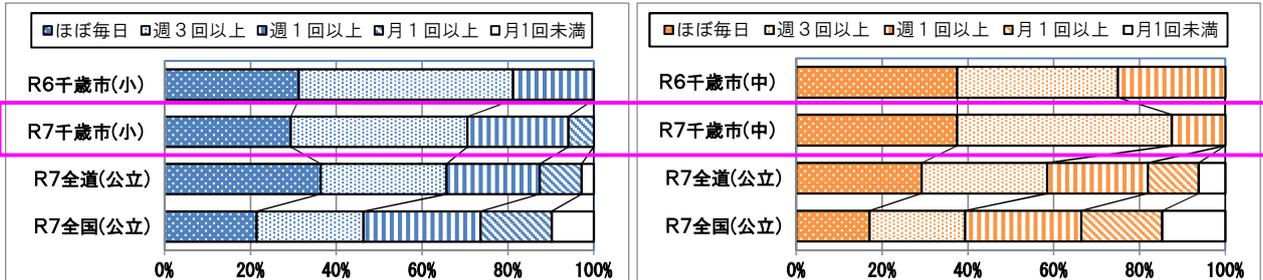
本市で実施しているハイパーQ U検査により、客観的に学級集団の実態を把握し、その結果を基に、望ましい集団の育成を組織的に進めていくことが求められる。

⑤ ICT機器の効果的な活用

質問番号 58	調査対象学年の児童に対して、前年度までに、児童（生徒）一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業でどの程度活用しましたか。
------------	--



質問番号 62	調査対象学年の児童（生徒）同士がやりとりする場面では、児童（生徒）一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させていますか。
------------	--



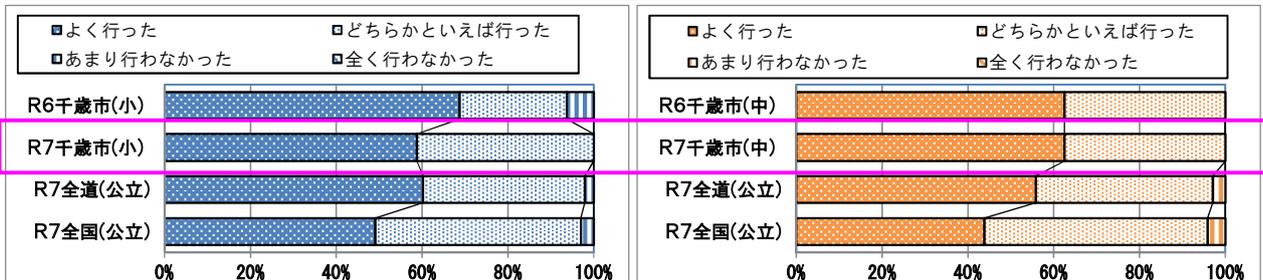
小・中学校ともICT活用が日常化

学習者用コンピュータを「ほぼ毎日（1日に複数回または1回）」活用していると回答した学校は、小学校88.3%、中学校100%で、全国（小84.8%、中82.8%）を上回った。研修やICT支援員の支援もあり、児童生徒の思考整理や教員とのやり取りなどでの活用が進み、電子黒板などと同様に日常的なものとなっている。

一方、学習者用コンピュータを児童生徒同士の意見交換に活用する割合は、「ほぼ毎日」と回答した学校が小学校29.4%、中学校37.5%にとどまる。全国（小21.4%、中17.1%）を上回るものの、さらなる活用の推進が望まれる。

⑥ 習熟度別少人数指導の充実

質問番号 48	算数（数学）の授業において、前年度までに、授業で、学習上つまずいた児童（生徒）に対する対応を行っていましたか。
------------	---



児童生徒の実態に応じた指導体制と方法の工夫が必要

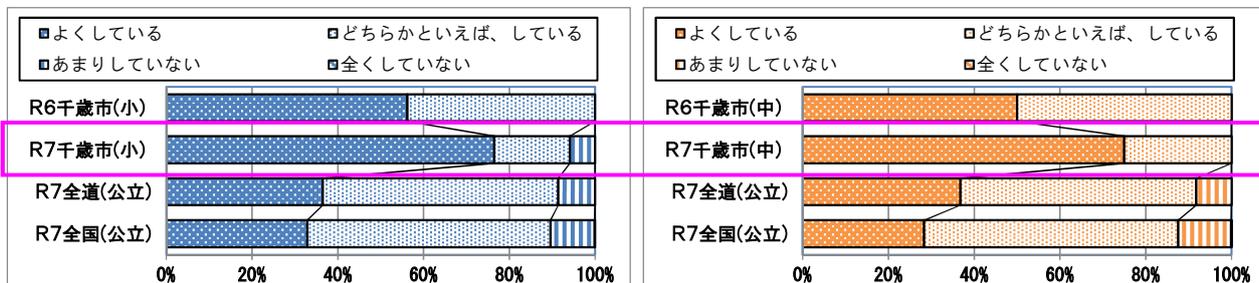
算数・数学で「つまずいた児童（生徒）に対する対応」を「よく行った」と回答した学校は、小学校58.8%、中学校62.5%で、全国を大きく上回った。こうした指導は、意欲や理解の向上に効果があるため、今後も継続が必要である。

その際は、千歳市独自の学習支援員や、道教委の加配教員を活用し、学校の実情に応じて体制や指導法を工夫し、少人数による習熟度別指導の充実を図ることが求められる。

2 千歳市教育委員会の「学力向上を目指す施策」に関して

① 教職員研修

質問番号 19	個々の教員が自らの専門性を高めるため、校外の各教科等の教育に関する研究会等に定期的・継続的に参加していますか（オンラインでの参加含む）。
------------	--



研修機会の拡充と教員の専門性向上が授業改善に直結

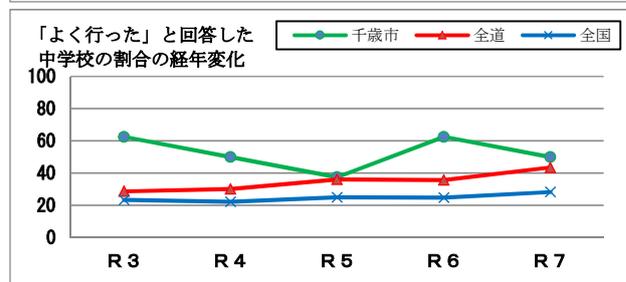
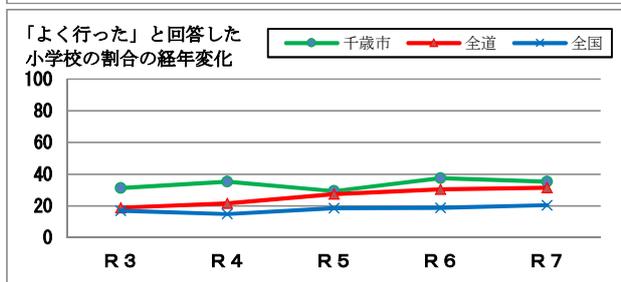
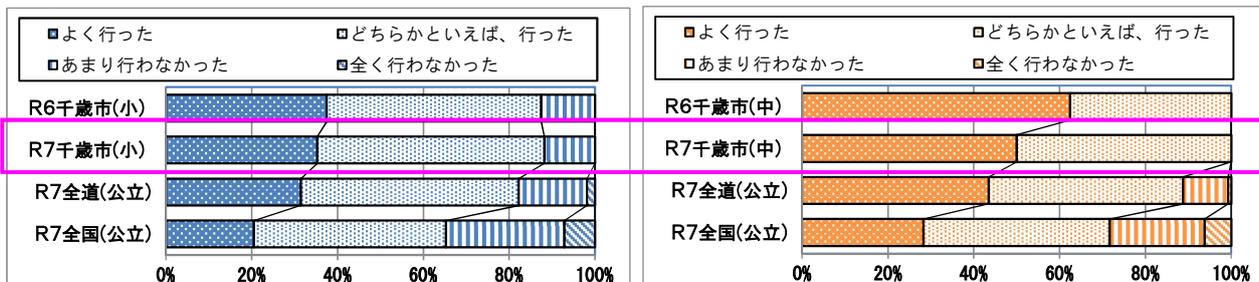
「よくしている」と回答した学校は、小学校 76.5%、中学校 75.0%で、いずれも全国（小 32.9%、中 28.3%）を大きく上回った。昨年度と比較すると、小学校で 20.2 ポイント、中学校で 25.0 ポイント上昇しており、コロナ禍の影響からほぼ回復したといえる。

校外の専門教科に関する研究会や、千歳市教育委員会、石狩教育研修センター主催の研修会は、教科指導の理解を深め、他校の実践を学ぶ貴重な機会である。今後もこうした研修に、積極的かつ継続的に参加できる学校体制の構築が求められる。

また、教員一人一人が専門性を高めることは、日々の授業改善に直結することから、研修を通じた資質・能力の向上が引き続き期待される。

② 小中一貫・連携教育

質問番号 72	前年度までに、近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組をどの程度行いましたか。
------------	---



全国を上回るも、接続・実践の継続的な連携が課題

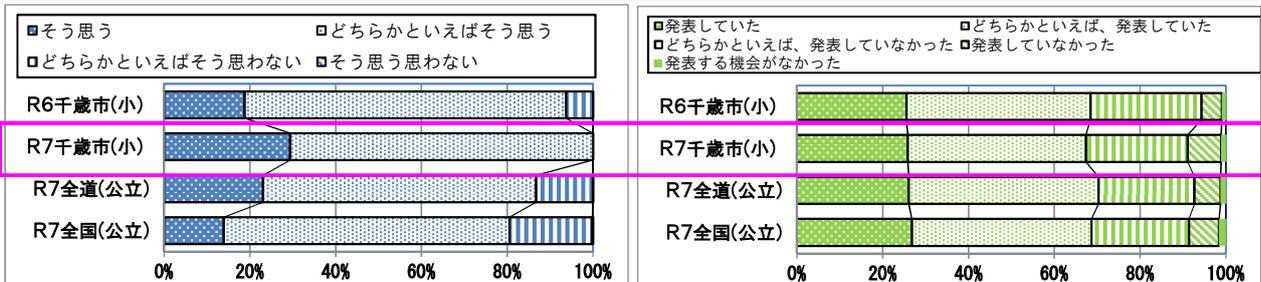
「近隣等の中（小）学校と、教科の教育課程の接続や共通目標の設定など、教育課程に関する共通の取組を行ったか」について、「よく行った」と回答した割合は小学校 35.3%、中学校 50.0%で、全国（小 20.5%、中 28.3%）を上回っている。一方で、昨年度と比べて小・中ともに割合が低下しており、中学校区単位での具体的な取組の継続と推進が求められる。「探究型・対話型」授業や ICT 活用の定着には、小・中学校間の教育課程の接続と実践の積み重ねが不可欠であり、今後さらに連携の充実が必要である。

3 授業に対する教師と児童生徒の意識の違い（児童・生徒質問調査の回答と比較）

① 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善—1

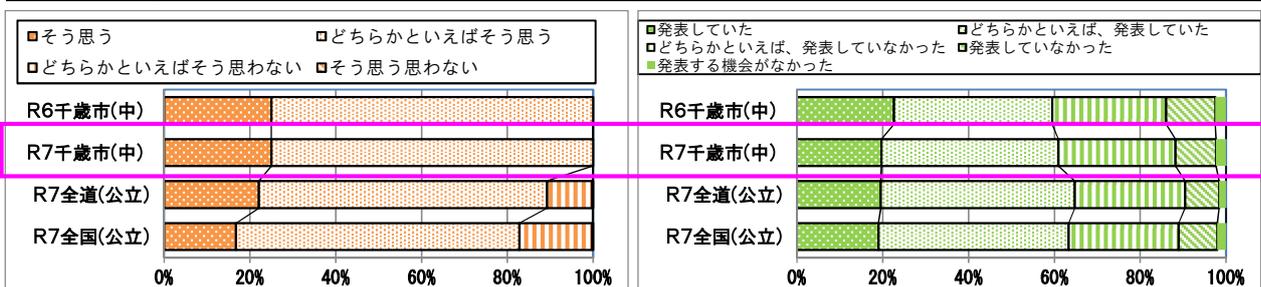
質問番号 26	調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。
------------	---

質問番号 31	5年生までに受けた授業で自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。 児童質問調査
------------	--



質問番号 26	調査対象学年の児童は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか。
------------	---

質問番号 31	1, 2年生のときに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか。 生徒質問調査
------------	---



「伝わる発表」に関する認識に差 小学校で縮小・中学校で拡大

「授業で自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを工夫して発言・発表できていると思うか」との問いに、肯定的に回答した学校は小学校・中学校ともに100%で、いずれも全国（小80.4%、中82.8%）を上回った。

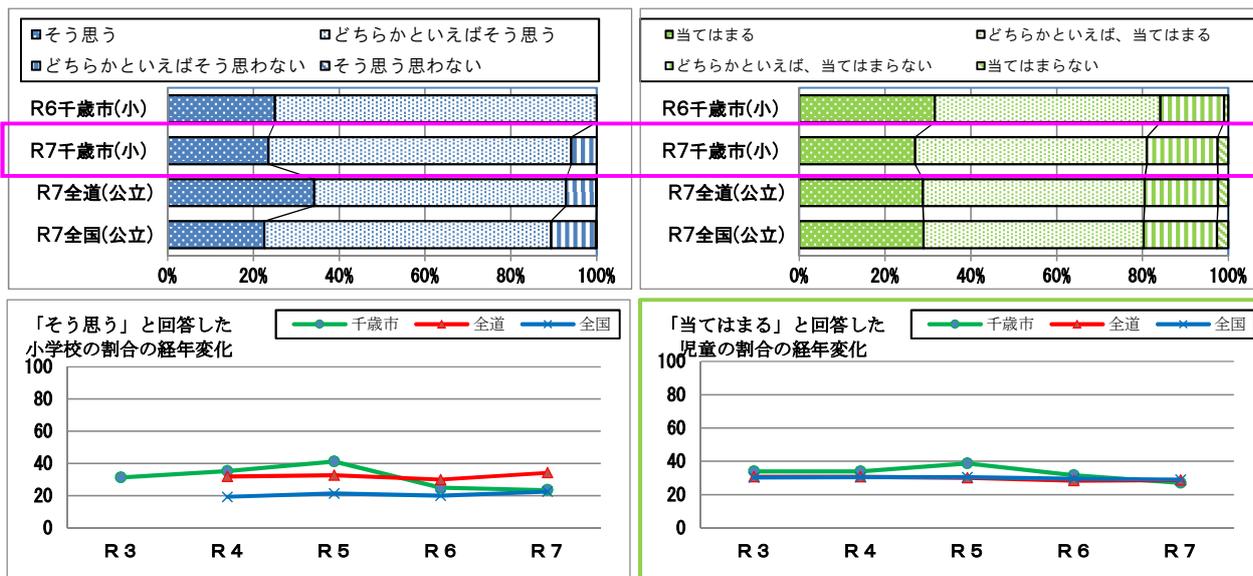
一方、児童生徒への質問「これまでの授業で、自分の考えが伝わるよう工夫して発表したか」には、否定的な回答が小学生32.6%（全国31.3%）、中学生38.9%（全国36.5%）で、教員と児童生徒の認識に差がみられる。

今後は、「指導と評価の一体化」の観点から、発表の目的・根拠・構成・表現等の観点を児童生徒と共有し、形成的評価（自己・相互評価や振り返り）を通じて学びを可視化し、次時の改善に結び付ける授業づくりを推進することが重要である。

② 主体的・対話的で深い学びの視点による授業改善—2

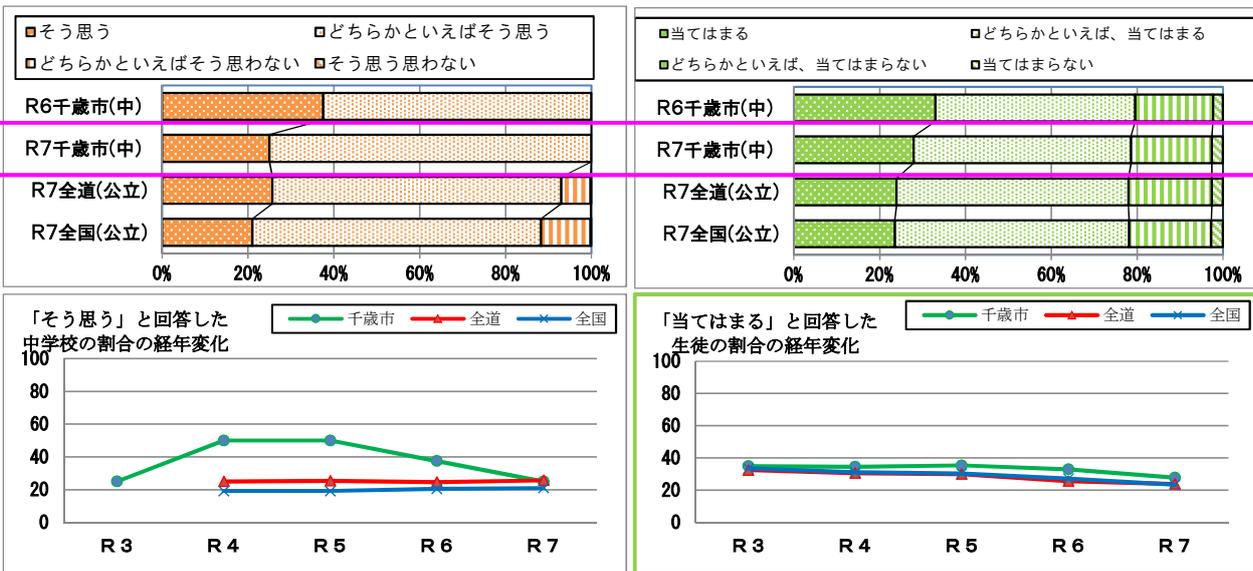
質問番号 25	調査対象学年の児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。
------------	---

質問番号 32	5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。 児童質問調査
------------	---



質問番号 25 調査対象学年の生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか。

質問番号 32 1, 2年生のときに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。 生徒質問調査



児童生徒の実感を踏まえ、主体的な学びの定着を図る授業改善へ

「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか」との問いに対し、肯定的に回答した学校は小学校 94.1%、中学校 100%で、全国（小 89.3%、中 88.2%）を上回り、学校側の評価は総じて高水準である。

一方、児童生徒自身の回答では、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」に否定的に回答したのは、小学生 19.0%（全国 19.7%）、中学生 21.3%（全国 21.7%）で、全国よりやや低いものの一定の否定層が存在し、「授業改善－1」と同様に教員と児童生徒の認識に差がみられる。

今後は、すべての児童生徒が興味・関心を生かして課題を見出し、学習活動を主体的に選択できるよう支援するとともに、「書く・話す・発表する」等の発信を通じて思考を深化させ、新たな気づきにつなげる「探究型・対話型」授業の一層の工夫・改善を推進することが重要である。